

エジプト農村の世帯・家族構造

加 藤 博・岩 崎 えり奈

はじめに

1. 方法とデータ
2. 19 調査村
3. 19 調査村における世帯の人口学的特徴
4. 19 調査村における世帯構造
5. 4 調査村における家族構造
6. 世帯構造の歴史的変化－事例研究

まとめ

はじめに

われわれはこれまで、多角的なアプローチでもって、エジプトの農村社会の分析を進めてきた。ここで多角的なアプローチによる分析とは、性格を異にするさまざまなデータ・情報に基づいての分析という意味である。本稿は、このアプローチによる分析を、世帯・家族構造に適用したものである。

家族は、エジプトを含むアラブ社会研究において、最も好まれてきた研究テーマのひとつである。それは、家族が社会生活において重要な役割を果たしてきたと考えられ、さらに、家族構造のなかに、その社会のプロトタイプを見ようとしてきたからである (Hopkins 2003)。

ところが、こうした重要性の強調にもかかわらず、アラブ社会で果たしてき

た家族の役割や機能に関する実証的な研究となると、その数は思いのほか少ない。そのため、誇張された家族のイメージが一人歩きすることにもなる。本稿は、その欠を補うために、エジプト農村社会における家族についての基礎的なデータ・情報を提供し、その理論的分析の枠組みを提示することを目的としている。

1. 方法とデータ

1-1 方法

われわれの研究スタンスの独自性を一言で述べれば、分析におけるミクロとマクロ、定量と定性、方法論的個人主義と方法論的全体主義の両者に、ともに軸足を置こうと努めることである。もちろん、社会科学の分析における、この二項対立のアポリアを克服するなど大それたことを主張するものではない。

ここで、われわれが述べたいのは、これまでの経験から、ある社会をその総体として理解しようとする、先の対立する分析枠や分析法をともに駆使しなければならないとの痛切な思いである。しかし、われわれができることといえば、二つの分析枠や分析法の間を行き来して、それぞれの分析結果をフィードバックさせることでしかない。

おそらく、これはエンドレスに続く作業であろうが、結果のよしあしにかかわらず、続けざるを得ない作業である。冒頭で指摘した「多角的なアプローチでもって」とは、以上の含意をもって使われた。そして、このアプローチは、性格を異にするさまざまなデータ・情報に基づかせてはじめて可能となるものであろう。かくて、本稿で依拠されるデータ・情報とは、次の五つである。

- (1) その多くが政府によって収集され、集計された村（カルヤ）単位での統計データ。

- (2) 独自の世帯調査によって収集された家計単位の統計データ。
- (3) 独自に作成された詳細な村のデジタル地図を含む地理情報。
- (4) 村の有力者に所蔵されている歴史文書。
- (5) そのほか、村の組織、有力者、村民に対するインタビューによって聞き取られた、村や村民に関する情報。

このうち、本稿が主として依拠するのは (2)、(3)、(4) の資料であるが、それが具体的にはどのようなものであるかは、後述する。

1-2 基本概念の定義

エジプトにおいて一般的に家族をさす言葉は、アーイラとウスラである。この両者は互換的に使われ、とりわけアーイラに関しては、多義的な意味合いを持って使われる(加藤 2010)。つまり、核家族のような共住単位から、部族に当たるような親族集団までを意味するのである。そこで、本稿では、社会的な文脈でのアーイラとウスラの意味内容には踏み込まず、この二つの単語について、ウスラを世帯、アーイラを家族と呼んで分析を進める。それは、アーイラとウスラという二つの言葉を定義せずに「家族」を論じると、論理の明晰性を欠くことにならざるを得ないからである。

そこで、本稿では、この定義上の区別を念頭に、世帯とは、消費を共有する共住単位であり、家族とは、世帯を基本とした社会生活の単位であるとして議論を進める。われわれの関心は、家族の社会生活での役割であり機能である。しかし、家族は、物質生活での基本単位である世帯を核として形成されている。そのために、まず世帯を分析し、それを踏まえて家族の分析に向かうというのが、妥当な議論の進め方であろう。

と同時に、分析を世帯から始め、家族へと向かうことは、統計データを処理するうえからも必要である。なぜならば、国家が作成する人口学的なデータ

は、世帯を単位としているからである。世帯を単位としてのみ、国家が作成する人口学的なデータとわれわれが農村世帯調査で収集した統計データとを比較することができる。

1-3 データ

先に述べたように、本稿は主に、家計単位の統計データ、村のデジタル地図を含む地理情報、村に所蔵されている歴史文書の三つの資料に依拠する。このうち、歴史文書については、後の第6節において説明するとして、ここでは、世帯調査による統計データと地理情報について、簡単に解説する。もっとも、この二つのデータ・情報がどのように収集・作成されたかについては、すでに別の機会において詳説したところから、以下はその概要である。

1-3-1 世帯調査の実施

世帯調査を中心とした農村調査は、2003年から2005年にかけて、一橋大学大学院経済学研究科とエジプト中央統計局（CAPMAS）との合同調査プロジェクトとして実施された。世帯調査の質問項目は多岐にわたったが、調査の主たる目的は、村落社会を所得分配、就業構造（農業と農外就業および労働移動）、農業経営、親族構造などの観点から明らかにすることであった（加藤・岩崎2005）。

調査の対象となった村はエジプト全土にまたがる19か村であり、それぞれの村での調査のサンプル数は、村の人口規模で多少の調整をしたが、基本的には、ランダムに抽出された600世帯である。調査村の選定は、われわれの問題関心とエジプト中央統計局のスタッフからのアドバイスに基づいてなされた。調査村の選定基準と選定された19の村については、後述する通りである。

1-3-2 村のデジタル地図の作成

世帯調査で収集した統計データを空間的にも分析するために、地理情報を利用したが、その中心となったのが、村のデジタル地図の作成であった。それは、まず、村の現地でのフィールドワークによる、手書きの村の地図の作成から始まる。つまり、道路、建物を測量し、建物の階数を調べるとともに、世帯が居住している建物を確認する。そして、それらの情報に基づいて、次の6つの段階を経て、デジタル地図が作成された（Kato・Iwasaki 2008：7-9）。

- (1) 2,500分の1縮尺の地図をスキャンし、そこに村落境界の輪郭をトレースすることによって、ベースマップを作成する⁽¹⁾。
- (2) ベースマップをスキャンし、それに座標値を与える。
- (3) 村落境界をトレースしたベースマップに、フィールドワークによって測量された建物と世帯番号を書き込むことによって、建物単位の村落地図を作成する。
- (4) 手書きで作成した建物単位の地図をスキャンし、ベースマップと重ね合わせる。
- (5) 道路、建物のポリゴンを作図することによって、建物単位の地図をベクトルデータ化する。
- (6) 世帯番号情報をのせた点ポリゴンを作成する。

2. 19 調査村

2-1 調査村の選定

エジプトで実施されている家族に関わるもっとも網羅的な社会調査は、3年から5年おきに実施されている「人口保健調査」である（El-Zanaty et al. 2008）。そこには、出生と世帯に関するデータが提供されている。その報告書

によれば、世帯の規模、年齢構成、出生率、親族婚の割合において、下エジプトと上エジプトとの間に地域的な差異がみられる。

ところで、「人口保健調査」報告書は世帯について多くの情報を与えてくれるが、その調査の性格上、質問項目が限られている。そのため、エジプト農村社会の世帯をより多角的に分析するためには、独自に質問項目を設定した世帯調査の実施が必要となる。そこでわれわれは世帯調査を実施したが、その対象となったのが、後述する 19 か村である。

その際、調査村が特定の地方や地域に偏ることのないようにした。それは、ともすれば水利社会としてステレオタイプ化されて論じられるエジプト社会を、「地域」の概念を導入することによって打ち破りたいと考えたからである。そこで、村の選定に当たって、われわれがエジプト社会研究のなかで抽出しえた地域類型を参照にした。

それは、1996 年の人口センサスと「所得と消費に関する世帯調査 1999/2000 年」のデータに基づき、所得水準、教育水準、就業形態を指標としたクラスター分析によってあきらかになった地域類型であり、(1) 下エジプト中心部、(2) 下エジプト周辺部、(3) 上エジプト中部 (中エジプト)、(4) 上エジプト南部 (上エジプト) の四つの地域類型からなっている (Kato・Iwasaki 2008 : 14-16)。

この四つの地域類型に (5) オアシス地域を加えた五つの地域を基準として、図表 1 と 2 で示される調査 19 か村が選定された。それを地域ごとに整理して列挙すれば、次の通りである⁽²⁾。

2-2 調査村

エジプトは、行政的にみて、カイロを境として、北方の地中海までの下エジプト・デルタ地方、南方の上エジプト地方、そして辺境地方に分かれる⁽³⁾。

図表 1：19 調査村の概要

地域類型	村	県	郡	人口 (2006年)	サンプル 世帯数	調査年
下エジプト中央部	Abu Senita	Menufiya	Bagur	4,468	600	2003-2004
	K.Shubrahur	Daqhaliya	Shinbelawin	515	130	2005
下エジプト周辺部	Zahra	Sharqiya	Zagazig	5,082	600	2003-2004
	Abu Tawala	Sharqiya	Mit al-Qamh	5,458	600	2003-2004
	K. Beni Hilal	Beheira	Damanhur	5,933	600	2005
	Sidi Oqba (1)	Beheira	Mahmudiya	20,429	600	2005
	Hamra	Kafr Sheykh	Kafr Sheykh	9,252	1,000	2005
	Borr Bahry	Kafr Sheykh	Burulus	8,214	200	2005
上エジプト中部	Homa	Beni Suef	Wasta	6,148	600	2003-2004
	Demeshqin	Fayyum	Fayyum	6,501	600	2005
	Beni Samrag (2)	Minya	Samalut	9,810	600	2005
上エジプト南部	Kawamel Bahry	Sohag	Dar al-Salam	4,461	600	2003-2004
	Awlad Sheykh	Sohag	Sohag	5,242	600	2003-2004
	Sheykh Issa	Qena	Qena	5,651	600	2005
オアシス地域	Bulaq	Wadi Gedid	Kharga	1,825	300	2005
	Munira	Wadi Gedid	Kharga	1,915	300	2005
	Balat	Wadi Gedid	Dakhla	4,273	550	2005
	Rashda	Wadi Gedid	Dakhla	4,364	550	2005
	Liwa Subih	Wadi Gedid	Farafra	2,710	100	2005

注 (1) Sidi Oqbaは52の集落からなる村であり、そのうち調査の対象となったのは、Ezba Sidi Oqba と Ezba al-Hajar の二つである。

注 (2) Beni Samrag は25余りの集落からなる村であり、そのうち調査の対象となったのは、Ezba Qasr Ummar、Ezba Abdulla、Ezba Abdulsalam の三つである。

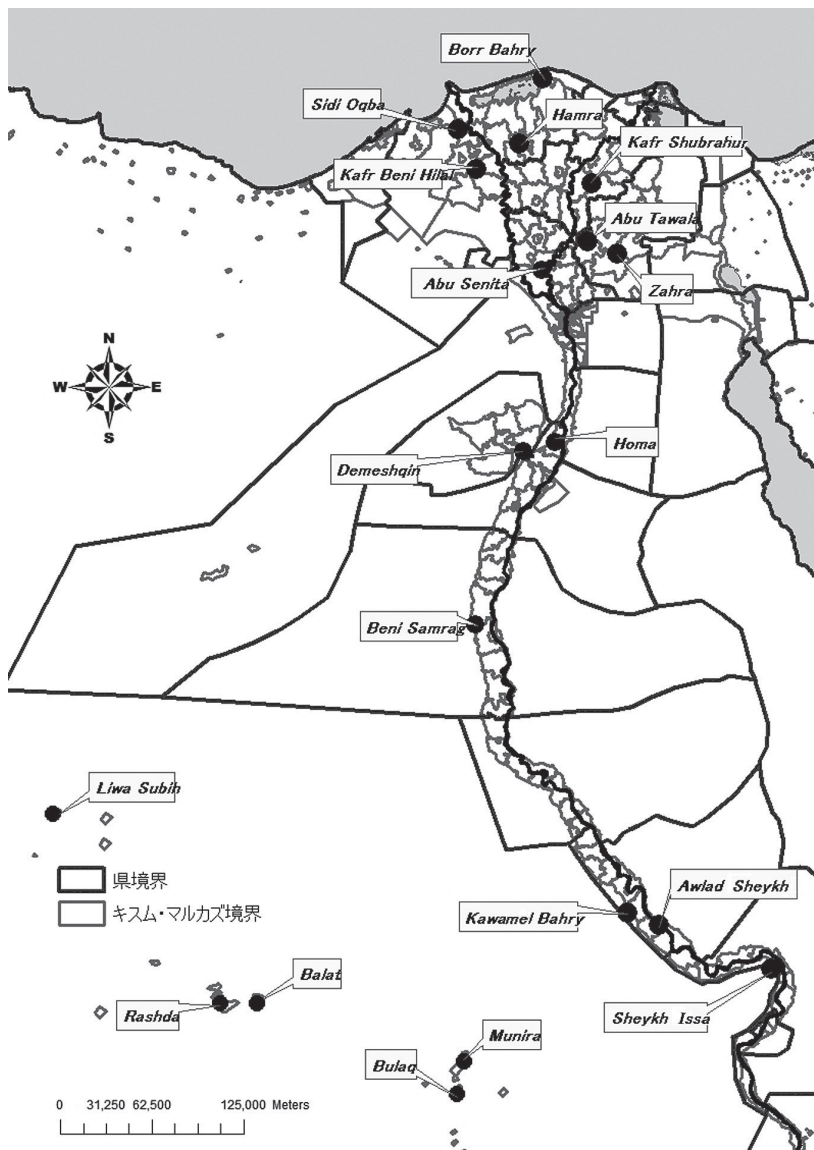
(1) 下エジプト中心部

下エジプト中心部は、下エジプト地方のうち、ロゼッタとダミエッタの二つのナイル支流にはさまれた地域を主として指す。現在の県で言えば、北からダカフリーヤ県、ガルビーヤ県、メヌフィーヤ県、そしてカリュビーヤ県に相当する。この地域は、古来、エジプトの農耕地帯として発展した地域である。この地域から調査村として選定されたのは、アブー・スィネータ村とカフル・シュブラフル村の二つである。

(2) 下エジプト周辺部

下エジプト周辺部は、下エジプト地方のうち、ロゼッタとダミエッタの二つのナイル支流の東西に位置する地域を主として指す。現在の県で言えば、東部

図表 2 : 19 調査村の立地



のシャルキーヤ県と西部のブヘイラ県，そして北部のカフル・シェイフ県に相当する。この地域から調査村として選定されたのは，ザフラー村，アブー・タワーラ村，カフル・ベニー・ヒラール村，シーディー・オクバ村，ハムラー村，ボッル・バハリール村の六つである。

(3) 上エジプト中部（中エジプト）

上エジプト地方は従来，サイドと呼ばれ，古来，行政的のみならず，文化的にも，下エジプトと異なる地方と認識されていた。このことは，住民の意識にも反映され，彼らの多くは，自らを「アラブ」と意識してきた。実際，上エジプト地方には，アラブの定住村が多い。

この上エジプトは，さらに二つの地方に分けられて議論される場合がある。上エジプト中部（中エジプト）と上エジプト南部（上エジプト）である。上エジプト中部は，現在の県で言えば，カイロに比較的近いベニー・スエフ県，ファイユーム県，そしてミニヤ県に相当する。この上エジプト中部から調査村として選定されたのは，ホーマ村，デメシュキーン村，ベニー・サムラグ村の三つである。

(4) 上エジプト南部（上エジプト）

上エジプト南部は，深部上エジプトであり，現在の県で言えば，アシュート県，ソハーグ県，ケナ県，そしてアスワン県に相当する。この上エジプト南部から調査村として選定されたのは，カワーメル・バハリール村，アウラード・シェイフ村，シェイフ・イーサー村の三つである。

(5) オアシス地域

以上の四つの地域がすべてナイルの水で農耕が営まれるナイル流域（ナイル峡谷）に立地しているのに対して，このオアシス地域は辺境地方に位置する。辺境地方とは，ナイルから遠くはなれた，東部砂漠地方，西部砂漠地方，シナイ半島，リビアとの国境に接したマトルーフ地方からなる。

そのうち，調査の対象となったのは，西部（リビア）砂漠に展開している，

そして行政的には「新峡谷（ワーディー・ゲディード）」県に所属するオアシス村落である。この「新峡谷」県はハルガ，ダハラ，ファラフラの三つのオアシスからなる。このオアシス地域から調査村として選定されたのは，ブーラク村，ムニーラ村，バラート村，ラシュダ村，リワー・スピーフ村の五つである。

3. 調査村世帯の人口学的特徴

さて，前節において指摘したように，3年から5年おきに実施されている「人口保健調査」報告書によれば，世帯の規模，年齢構成，出生率，親族婚の割合において，下エジプトと上エジプトとの間に地域的な差異がみられる。そこで，この報告書の内容と19調査村での世帯構造を比較するために，人口学的な指標に基づいて，19調査村での世帯の特徴を分析してみた。その結果が図表3であるが，そこでの情報を整理すると，次のようになる。

- (1) 規模：上エジプト地域の世帯は，下エジプト地域とオアシス地域の世帯と比較すると，その規模において大きい。
- (2) 年齢構成：上エジプト地域の世帯は，下エジプト地域とオアシス地域の世帯と比較すると，その年齢構成において若い。
- (3) 世帯主の性：ほとんどの世帯主は男性である。しかし，上エジプト南部のアウラード・シェイフ村では，女性の世帯主が多くなっている。おそらく，これは，海外への出稼ぎが理由であろう。

以上から，19調査村における世帯の人口学的な特徴は，「人口保健調査」と同じく，地域的な差異をもつと結論することができる。

エジプト農村の世帯・家族構造

図表3：調査村の人口学的特徴（単位：人、％）

	世帯数	世帯員総数	世帯規模(人)	年齢構成(%)				世帯主の性別(%)					
				15歳以下	15-64歳	65歳以上	計(人数)	女性	男性	計(人数)			
下エジプト中心部	Abu Senita	600	2,852	4.8	31.5	63.0	5.5	100.0	2,852	16.9	83.1	100.0	142
	Kafr Shubrahur	142	608	4.3	31.4	63.7	4.9	100.0	608	13.3	86.7	100.0	1,000
下エジプト周辺部	Zahra	600	2,469	4.1	34.3	61.5	4.2	100.0	2,469	10.7	89.3	100.0	600
	Abu Tawala	600	2,317	3.9	29.8	64.2	6.0	100.0	2,317	16.8	83.2	100.0	600
	Kafr Beni Hilal	595	2,497	4.2	33.2	64.3	2.6	100.0	2,497	15.5	84.5	100.0	595
	Sidi Oqba	600	2,877	4.8	29.9	67.4	2.8	100.0	2,877	13.7	86.3	100.0	600
	Hamra	1,000	6,278	6.3	29.1	67.4	3.4	100.0	6,278	11.3	88.7	100.0	600
	Borr Bahry	200	1,307	6.5	38.4	59.5	2.1	100.0	1,307	4.0	96.0	100.0	200
上エジプト中部	Homa	600	3,172	5.3	41.8	55.0	3.2	100.0	3,172	10.8	89.2	100.0	600
	Demeshqin	600	3,291	5.5	38.5	57.8	3.7	100.0	3,291	12.0	88.0	100.0	600
	Beni Samrag	600	3,712	6.2	41.8	53.5	4.7	100.0	3,712	16.2	83.8	100.0	600
上エジプト南部	Kawamel Bahry	600	2,907	4.8	40.3	55.7	4.0	100.0	2,907	7.2	92.8	100.0	600
	Awlad Sheykh	600	2,744	4.6	43.5	53.8	2.8	100.0	2,744	37.5	62.5	100.0	600
	Sheykh Issa	600	3,343	5.6	30.5	62.3	7.2	100.0	3,343	20.2	79.8	100.0	600
オアシス地域	Munira	300	1,332	4.4	25.7	67.5	6.8	100.0	1,332	7.3	92.7	100.0	300
	Bulaq	301	1,323	4.4	26.1	66.8	7.1	100.0	1,323	9.6	90.4	100.0	301
	Rashda	550	2,305	4.2	26.3	69.0	4.7	100.0	2,305	4.6	95.5	100.0	550
	Balat	550	2,269	4.1	27.1	66.9	6.0	100.0	2,269	8.4	91.6	100.0	550
	Liwa Subih	100	541	5.4	42.9	55.6	1.5	100.0	541	3.0	97.0	100.0	100
計	8,896	44,143	4.9	33.7	61.9	4.4	100.0	46,296	13.9	86.1	100.0	9,438	

(出所) 農村世帯調査データ 2003～2005年。

4. 19 調査村における世帯構造

村での世帯構造を知るためには、第2、3節でのように、人口学的な特徴を指摘するだけでは不十分であり、より構造的な特徴の分析を必要とする。そこで、世帯調査項目から構造的な特徴を示す基本的な項目を取り上げて、その特徴を示せば、次の通りである。

4-1 世帯のタイプ

図表4からあきらかなように、最も多い世帯の型は、一組の夫婦とその子供からなる核家族型である。どの調査村においても、核家族型の世帯は世帯の大部分を占める。

現代のエジプト社会において、核家族型の世帯構成が一般的であることは指摘されてきた。われわれの分析結果は、この指摘を確認するものとなった。

しかし、少ないながら、他の世帯型もみられる。それらは、片親とその子供からなる世帯と、核家族に世帯主の親かその他の親族が加わるケースである。

図表4：調査村の世帯構成（単位：％）

		単独世帯	夫婦のみ	夫婦+未婚子	世帯主+未婚・離婚離別子供	その他	計	(世帯数)
下エジプト中心部	Abu Senita	4.5	8.4	66.7	7.4	12.9	100.0	595
	Kafr Shubrahur	5.0	10.8	60.4	8.6	15.1	100.0	139
下エジプト周辺部	Zahra	4.0	11.8	72.5	8.3	3.3	100.0	600
	Abu Tawala	7.3	13.2	66.3	11.5	1.7	100.0	600
	Kafr Beni Hilal	3.6	8.1	70.6	11.7	5.9	100.0	589
	Sidi Oqba	2.7	7.8	64.9	9.1	15.5	100.0	592
	Hamra	2.7	2.9	51.4	8.2	34.9	100.0	940
	Borr Bahry	0.5	62.6	2.5	4.6	29.8	100.0	198
上エジプト中部	Homa	3.0	8.1	68.3	8.9	11.6	100.0	593
	Demeshqin	4.0	4.0	68.0	8.3	15.7	100.0	593
	Beni Samrag	3.3	6.6	52.3	10.3	27.4	100.0	572
上エジプト南部	Kawamel Bahry	3.2	12.9	69.1	4.8	10.0	100.0	598
	Awlad Sheykh	6.0	10.6	43.4	30.2	9.9	100.0	597
	Sheykh Issa	7.5	6.3	47.9	8.2	30.2	100.0	576
オアシス地域	Munira	6.4	7.7	72.6	2.7	10.7	100.0	299
	Bulaq	6.4	8.1	70.0	7.4	8.1	100.0	297
	Rashda	1.3	12.4	74.7	4.0	7.7	100.0	549
	Balat	3.7	10.8	74.6	4.8	6.1	100.0	544
	Liwa Subih	1.0	78.0	5.0	3.0	13.0	100.0	100
計		4.2	8.6	63.6	9.4	14.3	100.0	9,571

(出所) 農村世帯調査データ 2003～2005年。

4-2 世帯構成

世帯構成をより詳しくみるため、同居親族の規模と構成を検討してみよう。ここでは、厳密な比較検討の指標として、同居親族集団の世帯主に対する関係別の構成と、その親族集団の100世帯あたりの規模を取り上げる。子供を含む夫婦家族単位を除いているため、観察される親族規模は世帯主の配偶状態や子供の数に影響されず、より直接的なカタチでその構成を示すことができるからである。その結果が図表5である。

この表をみて気づく第一は、同居親族集団の規模の小ささである。同居親族

エジプト農村の世帯・家族構造

集団の規模は、カフル・シュブラフル村、ハムラー村、ボッル・バハリール村、ベニー・サムラグ村、シェイフ・イーサー村、リワー・スピーフ村では例外的に大きい、それ以外の13の村では非常に小さい。したがって、調査村では、地域に関係なく、親族と同居する傾向は非常に少ないと言える。

第二に同居親族集団の構成については、上述の六つの村を除いて、世帯主の親や兄弟姉妹との同居は、ほとんど無視できる数字ではあるものの、世帯の型にバリエーションをもたらす重要な要素となっている。すなわち、それは、親よりも子供の配偶者の数が多いことから、親が結婚した子供と一緒に住む世帯と、兄弟姉妹と同居する世帯の二つの型である。この二つの型は、孫や兄弟姉妹の子供を含むことがほぼゼロであるから、三世代に渡る同居ではない。したがって、世帯の拡大は二世帯までに限られるが、下向きと水平方向の傾向をもっている。

図表5：19か村における100世帯あたり親族成員数（単位：％）

		子供の 配偶者	親	兄弟 姉妹	孫	他の 親族	その他	計	(世帯数)
下エジプト中心部	Abu Senita	1.1	0.8	0.2	0.0	1.7	0.1	3.9	600
	Kafr Shubrahur	2.5	8.9	0.5	0.0	19.8	1.0	32.7	142
下エジプト周辺部	Zahra	0.4	0.1	0.2	0.0	0.1	0.0	0.8	600
	Abu Tawala	0.1	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.4	600
	Kafr Beni Hilal	0.5	0.3	0.3	0.0	0.3	0.1	1.5	595
	Sidi Oqba	0.7	2.0	1.5	0.2	3.0	0.5	7.9	600
	Hamra	1.4	2.6	2.7	2.0	4.7	1.0	14.5	1,000
	Borr Bahry	11.5	22.5	22.0	2.0	44.0	3.5	105.5	200
上エジプト中部	Homa	1.3	0.5	1.2	0.0	1.2	0.0	4.2	600
	Demeshqin	1.3	1.0	0.9	0.0	2.2	0.2	5.6	600
	Beni Samrag	1.9	2.9	2.5	1.4	6.3	1.3	16.4	600
上エジプト南部	Kawamel Bahry	0.9	0.4	0.9	0.0	0.8	0.0	3.0	600
	Awlad Sheykh	1.0	0.1	1.2	0.0	0.1	0.1	2.5	600
	Sheykh Issa	1.9	2.6	2.6	0.8	5.5	0.7	14.2	600
オアシス地域	Munira	2.2	0.0	1.7	0.1	1.1	0.2	5.3	300
	Bulaq	2.3	0.4	3.3	0.0	0.9	0.2	7.2	301
	Rashda	1.0	0.2	0.5	0.1	0.4	0.0	2.1	550
	Balat	0.9	0.1	0.2	0.0	0.4	0.0	1.7	550
	Liwa Subih	7.0	3.0	0.0	0.0	9.0	0.0	19.0	100
計		0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.4	9,738

(出所) 農村世帯調査データ 2003～2005年。

(注) 世帯主本人とその配偶者および子供は除外した。

5. 4 調査村における家族構造

5-1 世帯と家族

以上、これまでは世帯構造に関する分析であった。それでは、われわれがもっとも関心を寄せている家族構造についてはどうであろうか。基礎概念の定義で触れたように、家族は世帯を基本とするものの、社会生活の単位として、世帯を超えた存在である。実際、本稿では家族をアラビア語のアーイラと同定しているが、それは世帯であるウスラよりも多義的に、そしてウスラより大きい単位を意味することが多い。

そこで、エジプト社会での家族の役割や機能を知るために、アーイラを単位とした家族情報を得ようとするが、それは不可能である。それも当然のこと、繰り返し指摘しているように、アーイラは文脈に応じた多義的な使われ方をしているため、「人口保健調査」をはじめとした人口統計調査では、アーイラを単位としたデータはとられていないからである。

そこで、家族を単位とし、その構造を分析するためには、しかるべき工夫をしたうえで、データを集めなければならない。われわれは、それを次のようなデータ収集上の操作でもって行なった。それは、19か村において実施した世帯調査の質問項目として、村の住民に家族をどの範囲で意識しているかを把握するための質問を入れたことである。

その質問とは、「あなたの家族の名称（ラカブ・アーイラ *laqab al-'ā'ila*）は何ですか」というものである。ラカブ (*laqab*) とは、ニックネームとかタイトルを意味するアラビア語であり、住民が所属すると意識している「家族」集団の範囲を示すものと期待された。

つまり、この質問でわれわれが答えさせようとしたのは、家族の実際の範囲ではなく、村の住民が家族と意識している範囲である。われわれは、この質問

に世帯主が答えたラカブ・アーイラを家族名とし、それで示される集団を分析の単位として家族としたのである。以下、このデータ収集上の操作でなした家族構造の分析結果を紹介する。

5-2 4 調査村の選定

すでに詳しく述べたように、19か村が世帯調査の対象となったが、第4節での分析結果によれば、19か村における世帯構成は、地域の違いに関係なく同じであった。ところが、村民が家族と意識する範囲に関しては、その分析結果は異なり、家族と意識する範囲は地域によって異なった。

そこで、第一に、19か村のすべてを分析の対象にする必要はないと判断されること、第二に、家族の分析のためには、世帯を分析する以上に、より詳細なデータや情報を集めなければならないため、調査対象の19か村から、さらに4か村を選んで、分析の対象にした。

具体的には、上記に指摘した五つの地域から下エジプト周辺部を除く、四つの地域をそれぞれ代表する、次の4か村である。つまり、下エジプト中心部からアブー・スイネータ村、上エジプト中部からホーマ村、上エジプト南部からアウラード・シェイフ村、そしてオアシス地域からラシュダ村である⁽⁴⁾。

以下、この4か村での家族構造の特徴を規模、結婚相手、居住パターンの三点に絞って分析してみよう。

5-3 家族の規模

図表6にみるように、四つの調査村では、家族の規模が異なる。アウラード・シェイフ村とホーマ村では、家族がかなり大きな規模の集団として認識されている。特にアウラード・シェイフ村では、家族は50世帯以上からなる親族集団である。これは、住民の間で、「アーイラ・カビーラ」(大家族)とも呼ばれる範囲の集団である。

一方、アブー・スィネータ村とラシュダ村における家族は、先の二つの村と対照的である。同じ家族名で分類される世帯の数は、せいぜい五つか六つだからである。つまり、家族として認識されている範囲は、親や兄弟の範囲にとどまると考えて差し支えないだろう。

図表6：4か村における家族あたりの世帯数（単位：％）

	Abu Senita	Homa	Awlad Sheykh	Rashda
1～4世帯	13.6	4.7	0.3	5.5
5～9世帯	14.0	4.8	1.2	9.2
10～19世帯	18.6	11.8	0.0	17.8
20～29世帯	29.0	13.0	4.3	13.0
30～39世帯	6.3	5.3	0.0	0.0
40～49世帯	14.6	13.8	0.0	7.7
50世帯以上	0.0	40.2	94.0	15.4
村外からの移住	1.2	3.2	0.0	31.5
不明	2.7	3.2	0.2	0.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0
(世帯数)	601	600	600	546

(出所) 農村世帯調査データ2003～2005年。

5-4 結婚相手

この家族の規模における地域差は、単に出生率などの人口学的な違いによるものではないであろう。それは、家族構造が質的にも異なっているからであろうと考えられるからである。そこで、このことを検討するため、世帯主の結婚相手を取り上げてみる。

婚姻とは、世帯間の関係をつくりだす契機である。そして、従来、都市よりも農村、そして農村のなかでも下エジプト地方よりも上エジプト地方において、イトコ婚などの親族婚が好まれると指摘され、下エジプト地方より上エジプト地方の農村において、親族間の紐帯が強いと考えられてきた。

実際、2008年の「人口保健調査」報告書によれば、既婚（ないしは結婚を一度でも経験したことのある）女性の34.4％は、配偶者が親族であり、なかでもイトコないしは又イトコであった。そして、こうした親族婚は下エジプト地方や辺境地方よりも上エジプト地方に多いことが指摘されている。

そこで、四つの調査村に関する図表7の分析結果をみるに、調査村においても、「人口保健調査」報告書と同様の傾向が観察される。すなわち、下エジプト地域やオアシス地域よりも上エジプト地域において、世帯主が父方のイトコ

図表7：世帯主と配偶者との関係（単位：％）

	Abu Senita	Homa	Awlad Sheykh	Rashda
父方のイトコ	11.4	25.1	26.3	6.6
母方のイトコ	6.7	10.3	18.1	5.4
父方の又イトコ	2.3	6.3	9.8	1.5
母方の又イトコ	0.2	1.7	3.5	0.2
父方の他の親族	3.7	6.9	14.9	8.1
母方の他の親族	3.9	4.4	3.3	6.2
村民	44.9	33.0	17.1	63.1
職場の同僚	0.8	0.6	0.0	0.4
その他	26.2	11.8	7.0	8.5
計	100	100	100	100
(人数)	519	525	543	518

(出所) 農村世帯調査データ 2003～2005年。

や又イトコと結婚する傾向が強いのである。

5-5 家族の居住パターン

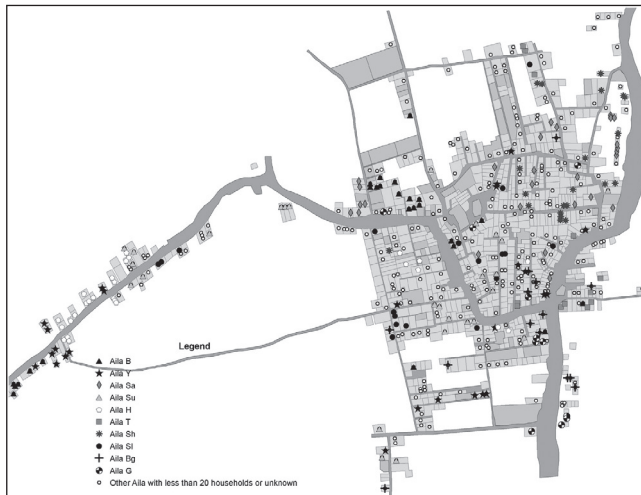
居住パターンは、家族構造の地域差を分析するための重要な視点である。なぜならば、家族の社会生活は、村という空間において展開するからである。そこで、四つの調査村において、家族を構成する世帯がどのようなパターンで居住しているかを分析してみた。

図表8, 9, 10, 11は、そのために、世帯を家族ごとに括り、それを村のデジタル地図上で表示したものである。この家族の分布をみると、アウラード・シェイフ村とホーマ村では、家族は集住し、村の居住空間が家族によって明確に区分されていることが分かる。

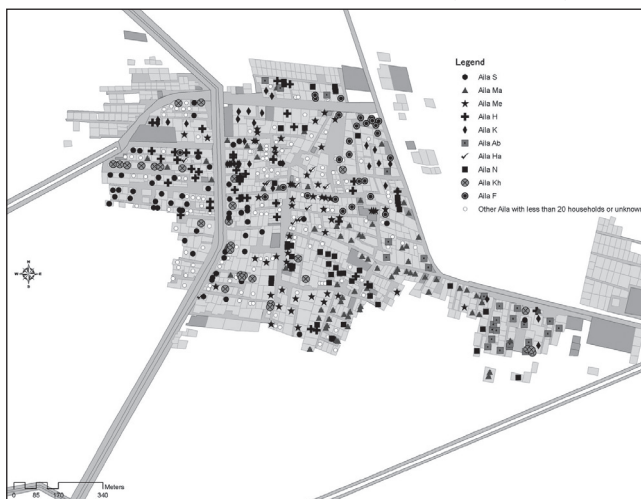
ことにアウラード・シェイフ村では、村の居住空間は四つの主要な家族により住み分けられている。最も古い地区に家族Aが、その西側と運河の南側に村長の家族Sが、家族Aの東側に家族Hが、そしてそのさらに東のはずれに家族Mが集住している。

これに対して、アプー・スイネータ村とラシュダ村では、家族が分散して居住している。つまり、下エジプト中心部とオアシス地域の村では、上エジプト中部と南部の二つの村のように、村の居住空間が家族によって秩序づけられて

図表8：アプー・スイネータ村における家族の分布（単位：世帯）



図表9：ホーマ村における家族の分布（単位：世帯）



図表 10：アウラード・シェイフ村における家族の分布（単位：世帯）



図表 11：ラシュダ村における家族の分布（単位：世帯）



いるようにはみえない。

5-6 社会生活の「きずな」としての家族

以上から、四つの村の家族構造について、というより、より正確には村民が

家族と意識する範囲について、分析を行なった。その結果を要約すると、次のようになると思われる。

まず何よりも指摘すべきは、家族意識の範囲が、地域によって大きく異なるということである。とりわけ、下エジプト中心部のアブー・スィネータ村、オアシス地域のラシュダ村と、上エジプト南部のアウラード・シェイフ村との差は大きい。

そして、家族意識の範囲において、下エジプト中心部と上エジプト南部の間にある上エジプト中部のホーマ村が、下エジプト中心部のアブー・スィネータ村と上エジプト南部のアウラード・シェイフ村の中間の規模を持っていることから考えて、上エジプト南部には、他の地域にはない、この地域に特有な家族意識があるように思われる。

つまり、アブー・スィネータ村とラシュダ村では、家族は少数の世帯間のつながりとして意識されているのに対して、アウラード・シェイフ村の場合、親族婚の頻度の高さと村での家族によるはっきりとした住み分けから判断して、家族は婚姻や集住を通して、大きな世帯集団として意識されている。

なぜアウラード・シェイフ村にこのような家族意識が観察されるのかについては、貧困など社会経済的な環境がそれと無関係ではないであろう。しかし、それ以上に、この拡大した家族意識には上エジプト南部に独特な文化伝統が深く関与しているように思われる。この点は、農村部から大カイロ周辺部への移住やカイロでの同郷組合に関するわれわれの既存の研究においても、確認できたことである（岩崎 2009a, Kato・Iwasaki 2010）。

しかし、この家族意識の範囲の違いをもって、家族の社会生活における役割や機能の違いとすることはできないように思われる。というのも、先の分析でみたように、家族を構成する世帯の構造に、地域差はみられないからである。問題とすべきは、エジプト村落の住民が世帯を単位として家族という社会的な「きずな」をどのように作っているかということであり、それをあきらかにす

るためには、世帯を村内であれ村外であれ、社会生活との関係で、あるいは社会生活のなかで分析しなければならない⁽⁵⁾。

6. 世帯構造の歴史的变化——事例研究

6-1 歴史文書

エジプト西部には西部砂漠あるいはリビア砂漠と呼ばれる、広大な砂漠が展開している。そこには、東からハルガ、ダハラ、ファラフラの三つのオアシスが存在し、オアシス住民たちは、古来、ナイルの水に依存したナイル流域とは異なる社会生活を営んできた。

ところで、エジプトは典型的な中央集権国家であり、残された地方文書が少ないことで知られている。ところが、この砂漠地方がエジプトの権力の中心、カイロから遠く離れていたからであろう、そこにはエジプトの地方社会では珍しく、多くの伝統文書が残されている。その一部は今日においても住民に参照される「生きた」文書であるが、その多くは歴史的な価値を持つ文書である。この歴史文書は、ともすれば中央からの視点に偏りがちなエジプト社会研究において、地方からの視点を与える貴重な研究資料となり得る。

さて、こうした歴史文書の一つとして、1861年の日付をもつ、西部砂漠のダハラ・オアシスにあるラシュダ村の「住民登録簿」⁽⁶⁾がある。これは、2005年にラシュダ村で世帯調査に当たっていたとき、偶然に有力者の自宅において見つけたものであり、1861年時点でのラシュダ村住民の登録簿の写しである。ここでは、世帯主の名前の下に、その世帯構成が、男女の性ごとに、そして名前と年齢を付されて、記載されている。

本節は、この文書から得られるデータと2005年に実施された世帯調査によって得られたデータとを比較することによって、ラシュダ村の過去150年における、世帯・家族構造の変化を探ることを目的とする。このような分析ができる

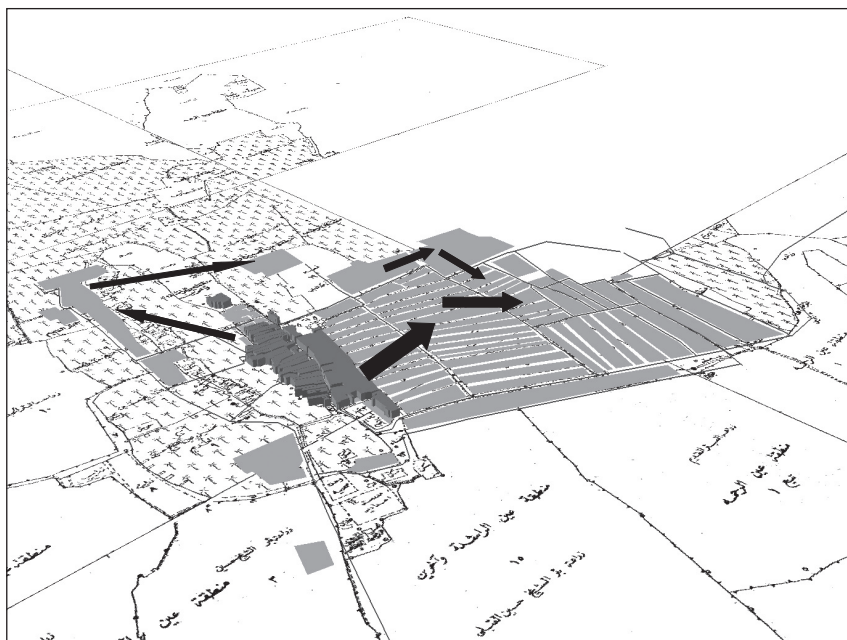
のも、村の住民登録簿という歴史文書が入手できたからである⁽⁷⁾。

6-2 ラシュダ村の歴史

ラシュダ村は、19世紀以降に形成された新しい村である。村民は、カラムーン村などの近隣の村から移住し、現在の村の西方にある小高い砂丘の上に住まいを構えた。この砂丘上の村の旧市街は、いまはほとんど廃墟となっている。現在の村の居住空間である新市街は、かつては耕地だったところで、20世紀半ば以降、旧市街から村民が移り住み、急速に市街地化した。

先の1861年の日付をもつ「住民登録簿」の対象となったのは旧市街であり、

図表 12：ラシュダ村の発展概念図



(出所) Kato・Iwasaki 2008 : 50

2005年に実施された世帯調査の対象となったのは新市街である。

6-3 1861年の世帯（マンズィル）構成

1861年の「住民登録簿」のデータについては、すでに分析が試みられている（加藤 2010）。住民登録は、すでに指摘したように、世帯（マンズィル）単位になされ⁽⁸⁾、世帯の構成員が男女別に、名前と年齢とともに記載されている。

世帯の形成は、親子関係と兄弟関係の二つの原理に基づいていた。このことは、「住民登録簿」に記載されている世帯が、次の4類型とさらにそれを分類した10タイプに整理できることからあきらかである。

類型1：親子関係を軸に形成された世帯（親子類型）

タイプ1 既婚の息子とだけ同居している世帯

タイプ2 既婚の息子ならびに未婚の息子と同居している世帯

タイプ3 未婚の息子とだけ同居している世帯

類型2：兄弟関係を軸に形成された世帯（兄弟類型）

タイプ4 既婚の兄弟とだけ同居している世帯

タイプ5 既婚の兄弟ならびに未婚の兄弟と同居している世帯。

タイプ6 未婚の兄弟とだけ同居している世帯。

類型3：親子関係と兄弟関係の二つの混合によって形成された世帯（親子・兄弟類型）

タイプ7 未婚の息子ならびに既婚の兄弟と同居している世帯

タイプ8 未婚の息子、既婚の兄弟ならびに未婚の兄弟と同居している世帯

タイプ9 未婚の息子ならびに未婚の兄弟と同居している世帯

類型4：親子関係も兄弟関係も持たない世帯（不安定類型）

ここで「不安定」と呼ぶ理由は、家族の形成原理である親子関係と兄弟関係をともに含まず、世帯の継続が不安定な状況にあると考えられるからである。

タイプ10 息子も兄弟も同居していない世帯。

住民登録の対象となったのは、50世帯、住民329名である。図表13は、そのデータを世帯の類型・タイプ別に整理したものである。そのなかで、後述する2005年の世帯データとの比較にとって重要なのは、次の七点である。

(1) 一つの世帯しかないタイプ8のような例外はあるものの、世帯は特定の類型やタイプに集中していない。類型1の優位がやや観察されるものの、世帯は四つの類型にほぼ均等に分布している。このことから、少なくとも1861年時点におけるラシュダ村では、世帯形成において、親子関係と兄弟関係は拮抗していたと判断される。

(2) 世帯の規模は最小で1人、最大で26人であり、全体の平均規模は6.6人である。規模が最も大きいのはタイプ7であり、平均13人である。類型ごとの規模では、類型1と類型2はほぼ同じ規模で、それぞれ平均6.4人と平均6.8人であり、類型3はこの二つの類型よりはるかに大きく、平均10.2人である。他方で、類型4は小さく、平均2.3人である。類型3の高い、類型4の低い平均規模が際立っている。

(3) 19世紀中葉の文書からは、当時のエジプト農村の世帯において、少数ながら、奴隷など非親族成員が同居していたことが確かめられる。しかし、1861年のラシュダ村住民登録簿において記載されているのは、すべて親族成員である。

(4) 複数家族世帯は50世帯中8世帯（16%）である。世帯の体裁をなさない類型4を別にすれば、類型1, 2, 3では、およそ5世帯に一つ（17.6%, 23.1%, 18.2%）は複数家族世帯である。当然のことながら、既婚の息子、既

エジプト農村の世帯・家族構造

婚の兄弟と同居しているタイプ1, 2, 4, 5, 7に, 複数家族世帯がみられる。

(5) しかし, 孫と住む三世代同居世帯となると, 類型1に集中している。三世代同居世帯は50世帯中4世帯(8%)であるが, そのうち, 類型1以外では, 類型3のタイプ7に一例をみるだけで, あとの三例は類型1である。また, 上記類型1の三つの複数家族世帯のうち, 二つが三世代同居世帯である。

(6) 母親同居世帯は50世帯中16世帯(32%)である。類型別にみると, 親子タイプの類型1にはみられず, 兄弟との同居世帯である類型2と3に, それぞれ8世帯(61.5%)と4世帯(36.4%)みられる。類型4は4世帯(44.4%)である。母親同居世帯の16例中13例が長男と同居している。つまり, 複数の兄弟がいる場合, その多くが長男との同居である。ほかの三例では, 世帯主となっている息子はいまだ未成年である。このように, 母親との同居は, 世帯形成原理の兄弟関係と関係する。つまり, 母親は兄弟との同居を可能にする「家

図表13: 1861年のラシユダ村における類型・タイプ別世帯特徴

	類型1				類型2				類型3				類型4	合計
	タイプ1	タイプ2	タイプ3	計	タイプ4	タイプ5	タイプ6	計	タイプ7	タイプ8	タイプ9	計	タイプ10	
世帯数	3	4	10	17	4	3	6	13	6	1	4	11	9	50
	6%	8%	20%	34%	8%	6%	12%	26%	12%	2%	8%	22%	18%	100%
世帯員数	26	33	49	108	36	26	26	88	78	10	24	112	21	329
世帯平均規模	8.7	8.3	4.9	6.4	9	8.7	4.3	6.8	13	10	6	10.2	2.4	6.6
世帯主平均年齢	69.0	50.4	43.0	51.1	44.5	34.7	24.4	31.5	46.7	40.0	32.0	40.7	23.0	40.1
労働力成員数*	5	16	17	38	8	13	7	28	23	4	9	36	5	107
労働力成員一人当たり平均扶養者数	5.2	2.1	2.9	2.8	4.5	2.0	3.7	3.1	3.4	2.5	2.7	3.1	4.2	4.2
母親同居世帯	0	0	0	0	1	3	4	8	1	1	2	4	4	16
姉妹同居世帯	0	0	1	1	0	1	4	5	1	0	0	1	3	10
ポリガミー	0	0	0	0	1	0	1	2	2	0	1	3	0	5
複数家族世帯	2	1	0	3	2	1	0	3	2	0	0	2	0	8
三世代同居	2	1	0	3	1	0	0	1	0	0	0	0	0	4

平均値を出す際、年齢を特定できない人物と世帯主のいない世帯(1例)は除いてある。

* 11歳から60歳までの男子成員。

(出所) 加藤2010: 108

族意識」にとって要となる存在である。

(7) 姉妹同居世帯は 50 世帯中 10 世帯 (20%) である。類型 1 と類型 3 に 1 世帯ずつあるほかは、類型 2 に 5 世帯 (38.5%)、類型 4 に 3 世帯 (33.3%) である。姉妹同居世帯の 10 世帯のうち、9 世帯が母親同居世帯である。先の世帯主が未成年の三つの母親同居世帯は、姉妹同居世帯でもある。つまり、母親と同居する世帯において、世帯主の姉妹も同居することが多い。

6-4 1861 年と 2005 年の世帯構成の比較

1861 年の「住民登録簿」データと 2005 年の世帯調査データに基づいて、過去 150 年間のラシュダ村の世帯構造を比較すると、まずその規模において大きな変化がみられる。つまり、平均世帯規模が、1861 年には 6.6 人であったものが、2005 年には 4.2 人に減少している。しかし、変化は世帯の構成において、より顕著である。

すでに指摘したように、1861 年には、親子関係と兄弟関係の二つが世帯を形成する重要な原理であった。このことを端的に示していたのが、世帯が特定の類型やタイプに集中せず、それらにほぼ均等に分布していたことである。こ

図表 14 : 1861 年と 2005 年の世帯構成

	1861		2005	
	世帯数	%	世帯数	%
既婚息子および未婚息子との同居	7	14.0	3	0.5
未婚息子との同居	9	18.0	378	68.7
既婚兄弟と未婚兄弟との同居	7	14.0	4	0.7
未婚兄弟との同居	6	12.0	1	0.2
未婚息子および既婚兄弟との同居	7	14.0	1	0.2
未婚息子および未婚兄弟との同居	5	10.0	4	0.7
息子および兄弟を有さない世帯	9	18.0	159	29.0
計	50	100.0	550	100.0

(出所) 1861 年住民登録簿、農村世帯調査データ 2005 年。

(注) 2005 年の「未婚息子および既婚兄弟との同居」は、未婚息子および既婚兄弟、未婚兄弟との同居である。

れに対して、2005年では、既婚の息子や兄弟との同居は無視できるほど少ない。

つまり、2005年の世帯構成を、1861年の類型に従って分類し、兩年度を比較すると、図表14にみるように、未婚の息子との同居は、1861年では18.0%であったのに対して、2005年では68.7%に上る。また、「不安定な世帯」は1861年では18%を占めるに過ぎなかったが、2005年では29%である。このうちの多くは、子供をもたない夫婦のみの世帯（38世帯）か、夫婦が息子をもたず娘と暮らす世帯（69世帯）である。

ところで、この1861年と2005年との間の世帯規模と世帯構成にみられる相違は、過去150年における家族システムの変化を意味するのだろうか。この点を吟味するため、100世帯あたりの息子、兄弟、その他の親族数を集計してみ

図表15：1861年と2005年の世帯構成の比較（100世帯あたりの人数）

	1861		2005	
	人数	100世帯あたりの人数	人数	100世帯あたりの人数
世帯主	50	100.0	550	100.0
世帯主の配偶者	41	82.0	518	94.2
息子	60	120.0	659	119.8
娘	35	70.0	513	93.3
兄弟	37	74.0	10	1.8
兄弟の配偶者	21	42.0	1	0.2
兄弟の子供	31	62.0		
兄弟の孫	1	2.0		
息子の配偶者	10	20.0	18	3.3
息子の子供	8	16.0		
母親	14	28.0	24	4.4
父親			4	0.7
イトコ	1	2.0		
イトコの配偶者	1	2.0		
イトコの息子	3	6.0		
姉妹	14	28.0	4	0.7
兄弟の母親	1	2.0		
その他			4	0.7
不明	2	4.0		
計	330	6.6	2305	4.2

(出所) 1861年住民登録簿、農村世帯調査データ2005年、インフォーマントの情報。

た。その結果が図表 15 である。

この表からみて、世帯主の配偶者、息子・娘の数は、1861 年と 2005 年で変わらない。したがって、1861 年と 2005 年との間に、出生率が大きく変化したとは考えにくい。あきらかに大きく変わったのは、世帯構成における兄弟とその配偶者および子供の数である。実際、兄弟の数は、1861 年では 100 世帯あたり 74 人であったのに対して、2005 年では 1.8 人でしかない。つまり、1861 年の 6.6 人から 2005 年の 4.2 人への平均世帯規模の減少は、同居する兄弟とその配偶者・子供の数の減少によって説明できる。

1861 年の住民登録簿の分析は、世帯主が兄弟と同居するのは、息子が未婚のときのみであることをあきらかにした。実際に、既婚の息子と既婚の兄弟の両方を含む世帯は存在しない。ここから、兄弟は息子の代替物であって、同居を余儀なくされる社会経済的条件が生じたときのみ、世帯主は兄弟と同居したと考えられる。換言するならば、兄弟関係は重要な世帯を形成する原理であるが、世帯での兄弟との同居は、一定の社会経済的条件のもとにおいてのみ実現したのである。

まとめ

エジプトでは、家族を意味するアラビア語として、ウスラとアーイラがある。この二つは互換的に使われることが多い。しかし、その意味に、大きな違いも観察される。ウスラは核家族のような共住単位を意味するが、アーイラはより一般的に「家族」を意味し、話される文脈に応じて異なった意味で使われるからである。つまり、規模の小さな共住単位としてのウスラを意味するほか、広く解される場合には、部族（カビーラ）規模の大きな親族・出自集団をさえ意味するからである。

本稿では、この違いを念頭に、ウスラを世帯、アーイラを家族と呼び、両者

を概念の上で区別して議論を進めた。世帯とは、消費を共有する共住単位であり、家族とは、世帯を基本とするが、より広義な社会での生活単位である。

なぜこのような概念上の区別にこだわるのか。それは、ウスラとアーイラにみられる意味の互換性や多義性を放置したまま家族という言葉を使うと、家族の分析においてあいまいさが残るからである。以上の概念上の定義を踏まえて、本稿での世帯と家族の構造分析における結果を整理すると、繰り返しになるが、大略、次の三つになると思われる。

(1) 世帯構造の特徴：地域差のない世帯編成

「人口保健調査」に代表されるエジプト全国規模の家族調査によれば、下エジプト地方と上エジプト地方の農村部の間で、世帯規模、年齢構成、出生力に関する人口学的特徴において違いがみられる。この点、われわれが独自に調査した19か村においても、同じく地域による人口学的特徴の違いが確かめられた。これに対して、世帯編成のうえでは、地域差は見られなかった。つまり、エジプト農村部における一般的な世帯は、地域の違いに関係なく、子供を含む夫婦家族のみの核家族型であった。

(2) 家族の構造上の特徴：地域差の大きい家族編成

ところが、分析の対象を家族に移すと、その分析結果は、世帯のそれと対照的である。つまり、詳細な情報を得るために、19の調査村からさらに地域を代表する4か村を選び出し、そこでの家族意識を分析してみると、家族の編成上の特徴は地域によって、とりわけ下エジプト中心部と上エジプト南部との間で大きな違いがみられたのである。家族は、下エジプト中心部では少数の世帯間のつながりでしかないのに、上エジプト中部と南部では、世帯を取り巻く人々の範囲を超えた集団として意識されている。実際、上エジプト南部の村で、家族と意識される範囲の大きさは印象的である。

なぜこのようなことが起きるのか。それは、貧困など、社会経済的な環境と無関係ではないであろう。しかし、それ以上に、上エジプト地域（中部、南部）に独特な文化伝統がそれに深く関与しているように思われる。また、この家族意識の違いをもって、家族の社会生活における役割や機能の違いとすることはできないだろう。というのも、先にみたように、家族の核となる世帯の編成には、地域差はみられないからである。したがって、問題にすべきは、村民が世帯を単位としてどのような家族という社会的な「きずな」を作っているかということであり、そのためには、世帯を村内であれ村外であれ、社会生活との関係で、あるいは社会生活のなかで分析しなければならない。

(3) 世帯構造の歴史的変化：世帯形成原理としての親子関係と兄弟関係

ダハラ・オアシス地方のラシュダ村に、1861年の日付をもつ世帯を単位とした「住民登録簿」が所蔵されていたところから、そこでの世帯データと2005年に実施した世帯調査での世帯データとを比較することによって、過去150年におけるラシュダ村の世帯編成の変化を分析した。

世帯が親子（父・息子）の垂直的な関係と、兄弟（姉妹）の水平的な関係とから成り立っているのは、1861年でも2005年でも同じである。しかしながら、世帯の規模とその編成において、大きな変化がみられた。つまり、1861年では、世帯の規模が大きく、世帯編成も多様であったのに対して、2005年では、世帯のほとんどが規模の小さな核家族だったのである。

そのため、両年での世帯編成をより詳しく分析したところ、世帯規模の変化が兄弟の同居との関係によってもたらされたものであることがあきらかになった。つまり、兄弟の同居の有無が世帯の規模を決定していたのである。

なぜ兄弟は1861年に同居し、2005年は同居していないのか。それに答えるのは今後の課題であるが、はっきりといえることは、兄弟関係は親子関係に次ぐ世帯の形成原理であるが、兄弟の同居は労働力の必要性など、世帯を取り巻く

社会経済環境次第だということである。

- 1 後に、グーグルの衛星地図を使うことによって、この作業が飛躍的に効率化した。
- 2 われわれはこの世帯・家族構造についての論文と同時に、エジプトの村落構造についての論文（「エジプトの村落地図」『一橋経済学』第4巻第1号，2011年）を用意しており、農村調査における19か村の選定基準、選定された19か村に関する詳しい情報については、その別稿を参照のこと。
- 3 近年、ルクソールが独立した県に昇格するなど、地方行政区の再編があった。本稿で言及する県名は、この地方行政再編の前において使われていたものである。
- 4 4か村の概観を述べれば、次のようになる。

アブー・スィネータ村：この村が立地するメヌフイーヤ県は下エジプト・デルタ地方のなかで最も人口が密集し、また教育水準が高いことで知られている。この村もまた、ナイル流域の調査村のなかで最も人口密度が高く、非識字率が低い。非農業就業者も多く、その多くは政府部門就業者である。村内のほか、郡庁所在地であるバーゲール市、県庁所在地であるシビーン・コム市、さらに数人だが65キロ離れた首都カイロに通勤する者もいる。

ホーマ村：この村は首都カイロから80キロ南、ベニー・スエフ県の県庁所在地のベニー・スエフ市からおよそ35キロ南に位置する。ベニー・スエフ県の村では非農業就業が少なく、教育水準が下エジプト地方とくらべると低い。なかでもこの村は県内の他の村とくらべても農業人口が多く、農業従事者が75.5%に上る。一方、政府部門などの非農業就業者は少ない。

アウラード・シェイフ村：この村が立地するソハーグ県は、中エジプト地方や他の上エジプト地方の県と同様に、農業人口が多く、教育水準が低い。しかし、その一方で、首都カイロや産油国などに収穫者を多く送り出してきたことで知られる。この村もそうであり、アラブ首長国連邦のアブダビへの収穫者が多い。

ラシュダ村：この村は、西部(リビア)砂漠の「新ナイル峡谷」(ワーディー・ゲディーード)県に位置する。この県には、ハルガ、ダハラ、ファラフラの三つのオアシスがある。この村はダハラ・オアシスに立地する。この村は、ハルガ、ダハラのアアシスに立地するほかの調査村と同様に、農業従事者が極端に少なく、政府部門就業者が際立って多い。また、教育水準もナイル川流域よりも高い。

- 5 この目的の一環として執筆されたのが、注(2)で指摘された、論文「エジプトの村落地図」である。

- 6 *Daftar ta'dād nufūs ḥiṣṣat al-shaykh aḥmad al-ḥājī muḥammad 'abd al-ḥāfiẓ*, dated 9 Jumādā II 1278 (1861)
- 7 われわれは、別の機会において（加藤 1997, Iwasaki 2008 ），歴史文書の情報と世帯調査のデータを比較することによって、村社会における家族（アーイラ）意識を分析した。そこで依拠した歴史文書とは、19 世紀中葉における下エジプト村落で生じた村方騒動に関する裁判文書である。
- 8 ここで世帯と訳した単語は、マンズイル (manzil) である。マンズイルは 19 世紀のエジプトにおいて、国家が国民を把握する単位であった。これは日本語で言う「所帯」を意味する（加藤 2010:115-113）。

参考文献

岩崎えり奈 2008

「所得水準・就業・教育水準からみたエジプトの地域類型」『アジア経済』第 49 巻第 9 号

岩崎えり奈 2009a

『変革期のエジプト社会—マイグレーション・就業・貧困』早山書籍工房

岩崎えり奈 2009b

「エジプトにおける所得の空間分布と構造：都市—農村，カイロ—地方間区分の検証」『アジア研究』第 55 巻第 2 号

落合恵美子ほか編 2009

『歴史人口学と比較家族史』早稲田大学出版部

加藤博 1997

『アブー・スィネータ村の醜聞—裁判文書からみたエジプトの村社会』創文社

加藤博 2010

「エジプト農村における「家族」（アーイラ）—19 世紀中葉オアシス村落に関する住民登録文書に基づいて」『東洋文化研究所紀要』第 157 冊

加藤・岩崎 2005

加藤博, 岩崎えり奈「エジプトにおけるマイグレーションと地域類型—三種類のデータ（センサス統計・世帯調査データ・地理情報）を接合する試み」『東洋文化研究所紀要』第 147 冊

加藤・岩崎 2011

加藤博, 岩崎えり奈「エジプトの村落地図」『一橋経済学』第 4 巻第 1 号

斎藤修 2002

「比較史上における日本の直系家族世帯」速水融編著『近代移行期の家族と歴史』ミネルヴァ書房

中根千枝 1970

『家族の構造 社会人類学的分析』東京大学出版会

速水融編 2003

『歴史人口学と家族史』藤原書店

El-Zanaty, Fatma and Ann Way 2009

Egypt Demographic Health Survey 2008, Ministry of Health, El-Zanaty and Associates, and Macro International, Cairo.

Hopkins, Nicholas (ed.) 2003

The New Arab Family, Cairo Papers in Social Science, vol. 24, no.1/2.

Iwasaki, Erina 2006a

“What is the Aila? : The Comparative Study of Kinship Structure in Egyptian Villages”, *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*, no.22-2

Iwasaki, Erina 2006b

“Analytical Framework for the Analysis of Kinship in North African Rural Societies: A Case Study of Commercial Migration in Southern Tunisia”, *Mediterranean World 18*, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University.

Kato, Hiroshi 2008

“Is the Egyptian Village a Community”, *International Journal of Public Affairs*, Chiba University, vol. 4, Research Center on Public Affairs for Sustainable Welfare Society, Chiba University

Kato・Iwasaki 2008

Hiroshi Kato and Erina Iwasaki, “Rashda. A Village in Dakhla Oasis”, *Mediterranean World 19*, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University

Kato・Iwasaki 2010

Hiroshi Kato and Erina Iwasaki, “Village Association in Cairo: A Study on Urban-Rural Relationship in Egypt”, *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*, no. 26-1

Kato et al. 2004

Hiroshi Kato, Ali El Shazly, and Erina Iwasaki, “Internal Migration Patterns to Greater Cairo—

Linking Three Kinds of Data: Census, Household Survey, and GIS", *Mediterranean World 17*,
the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University

Kato et al. 2005

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, Ali ELshazly, and Yutaka Goto, "Migration, Regional Diversity,
and Residential Development on the Edge of Greater Cairo—Linking Three Kinds of Data—
Census, Household Survey and Geographical Data—with GIS", Atsuyuki Okabe ed., *GIS-Based
Studies in the Humanities and Social Sciences*, Taylor & Francis, Oxford

Kato et al. 2006

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, and Naoto Yabe, "Residential Patterns of Rural Migrants in
Greater Cairo Suburban Areas", *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*
no.22-2

Kato et al. 2010

Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, Eiji Nagasawa, Hisao Anyoji, Nobuhiro Matsuoka and Reiji
Kimura, "Rashda: System of Irrigation and Cultivation in a Village in Dakhla Oasis",
Mediterranean World 20, the Mediterranean Studies Group ed., Hitotsubashi University

図表一覧

図表 1 : 19 調査村の概要

図表 2 : 19 調査村の立地

図表 3 : 調査村の人口学的特徴

図表 4 : 調査村の世帯構成

図表 5 : 19 か村における 100 世帯あたり親族成員数

図表 6 : 4 か村における家族あたりの世帯数

図表 7 : 世帯主と配偶者との関係

図表 8 : アブー・スイネータ村における家族の分布

図表 9 : ホーマ村における家族の分布

図表 10 : アウラード・シェイフ村における家族の分布

図表 11 : ラシュダ村における家族の分布

図表 12 : ラシュダ村の発展概念図

図表 13 : 1861 年のラシュダ村における類型・タイプ別世帯特徴

図表 14 : 1861 年と 2005 年の世帯構成

図表 15 : 1861 年と 2005 年の世帯構成の比較

The Structure of Household and Family in Rural Egypt

Hiroshi KATO and Erina IWASAKI

This paper aims to analyze the structure of household and family in rural Egypt, based on the three kinds of source materials, micro data at household level, geographic information and historical documents. These three kinds of data and information were collected in our surveys of 19 villages from 2003 to 2005.

In this paper, household is by definition a residential unit where individuals share consumption. It is called “usra” in Arabic. On the other hand, family is a social unit based on household. In Egypt, family is generally called “‘ā’ila” in Arabic.

We deal these two concepts of household and family, on the assumption that the basic unit of material life is household, and that family is a unit in social life which goes beyond the material life. Since family is based on household, our study bases its analysis on household.

The paper consists of following six parts.

Introduction

1. Data and methodology
2. 19 villages in rural survey
3. Demographic characteristics of household in 19 survey villages
4. Household structure of 19 survey villages
5. Family structure in 4 survey villages
6. Historical change of household structure: a case study

Concluding remarks

The findings in the paper are summarized as follows.

According to the nation-wide surveys, there are regional differences between Lower and Upper Egypt in regard to household size, age structure, fertility and consanguinity. The survey in 19 villages shows the same regional variation in regard to demographic

features.

As for the scale and structure of household, they are same regardless of region. Most of the households in rural Egypt now are nuclear household. On the contrary, the scale and structure of family differ by region. We conclude this regional difference as a cultural phenomenon that goes along with an arrangement of households within the village economy.

In comparison of household structure in 1861 and 2005 in Rashda village, the scale and composition of household differ largely. However, the numbers of spouse, son and daughter are same in these two years. This means that the difference lies in number of brothers. We conclude this difference not as a change of the family system, but as an arrangement within the individuals surrounding the household.